〈研究論文〉

大学における自閉症スペクトラム障がい学生支援としての居場所活動

―７年間の活動を振り返って見出されたこと―

青木　　剛（京都橘大学健康科学部）

１．問題意識の背景―Ａさんとの学生相談事例より―

ある男子学生Ａが、学生相談のカウンセラーである筆者の元に来談したのは、まだ肌寒さの残る４月のことであった。教務関係の事務職員に連れられ、下を向きとぼとぼと歩いて入室するＡの姿がとても印象的であった。面接の様子も、蚊の泣くような細々とした声で、生気は感じられなかった。筆者とのやりとりも単調で、筆者からの質問に数語で応答するだけだったが、きちんと答えようとしているようにも見え、Ａの実直さが垣間見られた。Ａは高校の時の人間関係の傷つきから抑うつ的になり、高校生の時から来談した４回生になるまで、引っ越しなどによる転院はあるものの、継続的に精神科を受診していた。大学に入ってからも人間関係を避けて過ごしているものの、抑うつ感は増す一方で、抑うつ状態がひどくなったことから休学の手続きを進めていた。休学の手続きが完了する３週間の間のケアと休学後の支援に繋がるようにとの事務職員の配慮から来談に至った。また、受診している精神科にて、自閉症スペクトラム障がい（Autism Spectrum Disorder; ASD）との診断もなされ、医師からも今後の大学生活の支援を受けるために休学前に学生相談への来談を薦められたとのことだった。Ａのこれまでの学生生活を聞くと、大学に入学してからは中高生の時からずっと関心のあったことを学べる楽しみを感じていた。生活の面では、一人暮らしの生活費を賄うためにアルバイトをしなければならないが、失敗が多く数か月で辞めさせられることが繰り返されていた。そのような生活の中、アルバイトや大学でも人間関係を極力避けて自身にとって安全に過ごすことを優先していたが、抑うつ感が募る一方で、次第に楽しいはずの学習も楽しいと思えなくなってきていた。ここ半年は身体的にも精神的にもアルバイトができるような状態ではなくなり、これまで楽しく学習していた図書館や授業に行くことさえも辛くなっていた。自炊のできないＡは食事を摂るためだけに朝に大学の学食に来て、食事以外はグラウンドの隅に腰を下ろし、夕食を食べる夜までただただ部活動をしている学生たちを眺めているという毎日を過ごしていた。そのような話を聞いていると、筆者には言いようのない寂しさが感じられ、「それは寂しかったやろうね…」と応答したところ、それまで下を向きうなだれていたＡがハッと顔を上げて筆者の顔を見、これまでにない少し大きな声で「はい」と答えた。その様子と抑うつ感の強さから、休学の手続きが完了するまでの間、筆者は筆者が勤務する週に２日の頻度で、それぞれ１時間の面接とすることを提案し、Ａもそれを希望した。面接を繰り返していると、徐々にＡから趣味の話をするようになったり、自分の趣味を筆者に見せるために実物を持参したりするようになるなど、抑うつ状態が改善している様子が見受けられた。休学の手続きが完了し、実家に帰省する直前の面接でＡは「こんなとこがあるなら休学しなくてもよかったのになぁ…」とつぶやいた。

ASD 学生の特徴としてコミュニケーションの不器用さがあり（佐々木・梅永，2011）、その不器用さのためにトラブルを経験することも多く、コミュニケーションをとる場所での心理的負担を回避するために人間関係を避けて過ごすことも少なくない。また、対象に対する感受性、関心、関わりの意欲が薄く（畑中，2011）、人間関係を積極的に作らないことも多々ある。とはいえ、彼らにとって人間関係が必要ないということではないだろう。上記の事例のＡさんにとっては、自分の話ができるという人間関係さえあれば、もう少し適応

的に大学生活を送れた可能性が大きいと思われた。筆者は複数の大学で学生相談に従事してきたが、Ａさんの通う大学には残念ながら居場所活動は実施されていなかった。Ａさんにとっては、自分のことを話して聞いてもらうという何気ない人間関係をもつ機会は少なかったのだろう。何気ない人間関係を作ることを避けやすく、積極的に人間関係を作りにくい ASD 学生にとって、安全な人間関係をもてたり、結果として人間関係が築けたりするような居場所活動があれば、ASD 学生が適応的に大学生活を送ることに役立つのではなかろうか。少なくとも、筆者は学生相談の場でＡさん以外にもそのように思われる学生数名と出合っている。

２．学生相談の中での ASD 学生支援

近年、学生相談の中でも ASD 学生支援は大きなトピックの一つである。大学での支援の対象となる ASD 学生は、著しい知的な遅れもなく、これまでの小中高校での学校生活の中で周囲の目からは目立って困ったことはない場合も多い(中島, 2013)。そのため、診断を受けておらず学生本人の障がいへの自覚も乏しいが、大学生活を送るにあたって初めて困った実感をもち、配慮を必要とする場合も少なくない。人間関係もその中の一つで、高校まではクラスという場があり、そこで毎日同じ人が集まることで、自分から積極的に人間関係を作ろうとしない ASD 学生も、自然と人間関係ができ、人間関係を作ることに困ることが少ない。あるいは、冒頭のＡさんのように、そうした自然とできた人間関係に傷ついて、むしろ人間関係があることに負担を感じて避けることさえある。しかし、大学では講義を受ける場所も人間関係も流動的で、継続した人間関係が自然発生的に生起する場面が少なく、意図して人間関係を作っていこうとしたり、人間関係を作っていくことへの関心がなければ、高校までに比べて人間関係を作ることが難しくなる。これまでむしろ煩わしいと思われた人間関係も、Ａさんのように結果として全くなくなってしまえば、少しは必要だったことが後になって理解されることも学生相談で出会う ASD 学生の中に、しばしば見受けられる。

先述した通り、学生相談で出会う ASD 学生の中には、診断が下されておらず、必ずしも診断が必要というわけではないこともある。本論文での ASD 学生とは、ASD と診断されている学生、あるいは診断はされていないが複数の学生相談に従事する臨床心理士が ASD 傾向を認めた学生とする。岩田(2007)は、ASD 学生支援について、大学の特性や在学する学生によっても異なるが、具体的な支援方法について示し、各大学で参照できるようにすることが急務であるとしている。近年では、ASD 学生支援は、カウンセリングやグループでのソーシャルスキルズトレーニング、大学や教員への当該学生の配慮願いなどさまざまになされており、研究も盛んになされるようになっている。居場所活動に関しては、独立行政法人日本学生支援機構(2014)の障がい学生支援に関するガイドブックの中で、「学内で食事が取れない・一人で過ごせない」ASD 学生に対して「居場所提供」が支援として挙げられているが、筆者の調べる限りでは、ASD 学生の支援という視点で居場所活動を論じた研究はみられない。しかし、支援例の１つとして挙げられていたり、冒頭のＡさんの事例に見られたりするように、居場所活動が ASD 学生の支援となると思われる例はあると考えられる。実際に、筆者が行っている居場所活動にも複数名の ASD 学生がこれまでに参加しており、その居場所活動を振り返ることで ASD 学生支援としての居場所活動を試論したい。

３．Ｂ大学における居場所活動

Ｂ大学における居場所活動は筆者が着任する2010年以前から実施され、2016年度で10年近く継続して実施されている。当初は、大学不適応の予防的アプローチとして開始された。当時はいわゆる「ランチメイト症候群」(町澤, 2001)や、「便所飯」(和田, 2010)と呼ばれるトイレの個室という独りで過ごせる安全な場で昼食を取る現象があり、そうした現象と大学不適応との関連についても指摘されてきた。一方で、大学での適応を促すことを目的に大学内でのピア・サポート活動が盛んに行われるようになり(たとえば、児玉, 2000；濱野, 2001；押江・青木, 2009)、実際にピア・サポート活動が大学不適応に対して予防的に寄与していることも示された(押江ら, 2011)。

表１　居場所活動の記録

実施年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
実施時間	12:10　～　14:00						
実施曜日	前期:月・木 後期:月・火・水	月・火・木					
学生スタッフ	7名	8名	9名	4名	3名	3名	3名
院生スタッフ	各曜日 1名ずつ						
延参加学生数	370名	619名	745名	518名	665名	598名	351名
参加学生実数	29名	49名	44名	29名	38名	25名	46名
継続参加学生実数	13(8)名	20(12)名	26(15)名	15(7)名	15(8)名	13(8)名	10(8)名

ピア・サポート活動は一般的に、学生が学生の相談を受けるような相談活動や、学生が障がい学生のノートテイクなどを行う修学支援、上回生が新入生の大学生活の支援を行う新入生支援の３つが挙げられる(大石ら，2007)。そうした支援の具体的な方法として、居場所活動もなされていることが報告されている(たとえば、鳥越ら，2013；鬼塚ら，2015)。Ｂ大学でも、大学不適応の予防や大学内での精神的健康の維持・促進のために、同じ大学生がピア・サポーターとして在室する居場所活動が実施されるようになった。つまり、本論文で取り上げる居場所活動は、開始当初、ASD学生のためにというよりは、広く大学生の大学不適応の予防や精神的健康の維持・促進のために実施された経緯があった。表１に筆者が関わってきた2010年以降の居場所活動の記録をまとめた。延参加学生数は、毎回の参加者数を単純に足したものであり、同じ学生であっても違う曜日や日に参加していれば重複して算出されている。参加学生実数は、実際に１度でも参加したことのある学生数で、学生の重複はない。継続参加学生実数は、その年度に５回以上参加した学生、あるいは前年度以前に５回以上参加していてその年度に１回以上参加した学生数でこちらも学生を重複して算出していない。継続参加学生数の()内は、継続参加学生のうち、ASD学生と判断された学生数である。

①　セッティング

活動は当初週に２回であったが、参加者からの要望から、2010年後期より週に３回となった。実施場所は主に福祉関係の実習が行える教室が使用された。25名ほどが着座できるほどのいくつかの可動式のテーブルとイスがあり、テーブルで３つほどの島を作り、参加者が分散できるようにしていた。また、壁に向いて座れてゆっくり一人でも過ごせるスペースも確保し、その他、６名ほどが着座できる座卓が置かれた和室も併設されていた。ただし、2015年度は大学の事情により別の部屋を使用しており、15名ほどが着座できるテーブルとイスのある小さな部屋であった。部屋にはBGMとして音楽を再生するCDレコーダー、オセロやトランプ、ジェンガといったテーブルゲーム、電気ポットと紙コップ、緑茶などを用意していた。

６月、10月、12月には学生への周知も兼ねて、大学クイズやゲーム大会などのイベントを行った。イベントは多くの学生への周知も兼ねてはいたが、継続参加学生同士がコミュニケーションをとれるように、何人かで一緒にチームになったり、一緒に作業するようなものを実施していた。たとえば、クイズをチーム戦にしたり、敢えて人数より少ない道具を用意してホットケーキを焼いたりデコレーションしたりするのに他の人と交流できるような工夫をしていた。

②　スタッフ

活動に関わるスタッフは、活動が始まった当初は、ピア・サポーターとしてのＢ大学の学部生の学生スタッフと他大学の臨床心理士養成大学院の院生スタッフと学生相談室の臨床心理士である学生相談スタッフであった。学生スタッフは、開始当初はボランティアサークルに所属する学生３名で始まっており、その後、その学生がボランティアサークル所属の有無を問わず適任と思われる後輩学生に声をかけることで引き継がれていた。2010年度からは、毎年度総勢３～９名の学生スタッフがおり、曜日ごとには１～４名のスタッフが在室していた。院生スタッフは、各曜日に１名ずつ在室していた。学生相談スタッフは常時在室しているわけではなく、相談予約がない時に様子を見に行き、適宜参加した。2011～2014年の間に、参加者数が増加したため、学生相談の受付業務も

兼務していた保健室の看護師が毎回１名参加していた。

スタッフは来室した学生に、毎回参加者名簿に名前と入室時間と退室時間を記入するよう求め、名簿で名前を確認し、声をかけるようにした。学生スタッフは参加者と一緒に昼食をとりつつ、趣味や学校生活の話などを聞いたり話をしたりするなど、何気ない会話をしながら過ごしていた。また、学生スタッフには、学期末はレポートやテストについて、ゼミ選びの時期にはゼミ選択時の研究室訪問の体験談など学生生活のそれぞれの時期にあった話をしたり、アルバイトの話やボランティア活動の話をするなど、学生スタッフ自身が経験したことを話してもらうなどしていた。また、話をする以外にも、トランプやジェンガなどのゲームをすることもあった。トランプをしたり、ジェンガをする際も話をしながら行うことも多く、その中で参加者の方から日常生活の何気ない質問や困ったことが話されて、スタッフやその他の参加者も含めて考えるようなこともあった。

活動後には、学生スタッフはB6の用紙にその日どんなことをしたのかや、対応に困ったこと、参加者に見られたポジティブな変化などを簡単に記録することとしていた。院生スタッフには、大学ノートを用意して活動日誌を記録し、別の曜日の院生スタッフとの連絡や参加者の留意点などを知らせたりしていた。また、それらの記録は学生相談スタッフが目を通し、適宜学生スタッフや院生スタッフのフォローも行った。学期ごとにスタッフミーティングも行い、参加者の様子や対応に困ったことのシェアや、各季節のイベントの計画などを行った。

③　参加者

居場所活動を開始した当初の2008年には、保健室スタッフや学生相談スタッフからの声掛けにより来室した、５名程度の学生が参加していたが、2010年にはそうした活動があることを知って自発的に一度覗きにくるような学生も複数見られるようになった。その後、参加した学生の口コミや、広報のために実施した大学に関するクイズ大会やゲーム大会、ハロウィンやクリスマスを祝う会などにより、徐々に参加者数は増えていき、多い時で20名程の学生が同時に在室することもあった。活動開始当初は保健室スタッフや学生相談スタッフから声を掛けた学生が参加していたこともあり、ASD学生の参加が見られ、継続的な参加となっていたが、コミュニケーションは不器用ながらも他者に関心のある学生であったため、緩やかで和やかな雰囲気が作られていた。それが幸いしたのか、その後の居場所活動でもコミュニケーションが穏やかな形で成されるような和やかな雰囲気が作られていた。そのため、勢いのある学生も時には参加するが、落ち着いた雰囲気を察してか、イベント時以外はそうした学生の来室は少なく、落ち着いた雰囲気に居心地の良さを感じる学生が集まることとなった。参加していたASD学生の中には、単純に人ごみを嫌ったり、聴覚過敏であったりするような特徴をもつことから、それほど人の込み合っていないところで静かにゆっくり昼休みを過ごしたいということを訴えて保健室に来室したことから、保健室スタッフに勧められて居場所活動に参加し始める学生もいた。ASD学生以外は、留年し５年以上在籍することになった学生や、普段の友人関係とは異なる人間関係を持てる場所で過ごしたいと言う学生、１、２回生の時に様子を見に数回参加していたがその数年後にふと来室して継続的に参加する学生、学内で落ち着いて過ごせる場所を求めて来室する学生などであった。

④　アンケート結果

2011、2012、2013年度末には、参加者にアンケートを実施した。アンケートは年度末の各曜日の最終活動日中に行い、無記名で回答を求め、回収箱を用意して活動中に回収した。複数の曜日に重複して参加している学生もいたが、アンケートを依頼した学生をチェックし、アンケートへの回答を重複して求めないように留意した。アンケートに回答した学生は、2011年度は16名、2012年度は13名、2013年度は11名で、全て継続参加学生であった。回答者は全員ASD学生というわけではないが、表１の継続参加学生の割合と同程度かそれ以上の割合でASD学生が含まれていた。アンケートの内容については、年度によっても多少異なるが、居場所活動を実施していることをどこで知ったのか、居場所活動に参加しようと思った理由、居場所活動に参加しての感想、今後の居場所活動に期待することなどであった。

表２　居場所活動に参加する理由

	2012年度	2013年度
昼食を食べるため	33.3%	63.6%
ｽﾀｯﾌや利用者と話したいから	16.7%	9.1%
ホッとするから	16.7%	45.5%
一人でﾘﾗｯｸｽするため	0.0%	45.5%
皆でｹﾞｰﾑをしたいから	22.2%	36.4%
時間つぶしのため	11.1%	36.4%
その他	0.0%	0.0%

表３　今後の居場所活動に期待すること

	2011年度	2012年度	2013年度
静かに昼食を食べられること	35.7%	4.0%	27.3%
友達関係を広げられること	64.3%	12.0%	36.4%
休息できること	78.6%	20.0%	63.6%
安心してｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝができること	57.1%	20.0%	36.4%
ｶｰﾄﾞｹﾞｰﾑなどを楽しむこと	21.4%	28.0%	36.4%
ちょっとした愚痴や不安等を聞いてもらえるこ	42.9%	8.0%	36.4%
履修やｾﾞﾐ選び、授業の受け方や試験対策、就活などについて相談できること	35.7%	4.0%	18.2%
その他		4.0%	0.0%

表４　居場所活動に参加した感想

	2011年度	2012年度	2013年度
1	みんなとしゃべれて楽しい	みんなとｹﾞｰﾑできて楽しかったです。	友達が増えた
2	ヒマつぶしになる	楽しい	交友関係が広がった
3	暇な時間がつぶせる。	気軽に行けて楽しい	色々な人と会って楽しく話すことができること。
4	Rの中で友達が増えた。 相談できる人が出来た。	友達が増えた	割と遅い時間から来たためになんとも言えない
5	学生生活の情報源としても活用出来たと思います	静かでよかったです	お昼のひと時を過ごすことができて、満足している
6	友達が出来た。 居心地よかった。	情報が得られる	意外と広くてﾘﾗｯｸｽできそう。和室(?)があるのが良い。
7	人との輪が広がった。	みんなやさしい	無記入
8	空いてる時間に利用できるところ。	静かに昼食を食べられるのがよかった	無記入
9	人の輪が広がった。 スタッフの先生とかとも知り合いになれ	ｽﾀｯﾌさんや先生が話しかけてくれたのがうれしかった。	無記入
10	昼食が食べやすく、楽しく過ごせたところ。	ﾘﾗｯｸｽできたりみんなでｹﾞｰﾑして楽しいと思いました	無記入
11	いろんなコミュニケーションを取れるし、様々な人と話をすることができる。	無記入	無記入
12	静かに昼食を食べられるところができたことが良かったです。	無記入	
13	居場所ができた事。	無記入	
14	先輩からのアドバイスがもらえること。 様々な人と交流できたこと。		
15	昼食を食べることができること。 心が安心できる場になった。		
16	くつろげる		

各年度の全ての質問項目についての回答結果を示すことは、紙幅の関係上避け、一部の質問項目についての回答結果を示すこととする。表２に居場所活動に参加しようと思う理由についての回答をまとめた。複数回答可としていたため、表中の数値は全回答者中のその項目の回答者の割合である。表３に今後の居場所活動に期待することについての回答をまとめた。この質問も複数回答可としていたため、表中の数値については、表２と同様の割合を表記している。表４として居場所活動に参加した感想(良かった点、悪かった点)の自由記述についての回答をまとめた。

上記結果より、当該居場所活動が昼食をとる場所としてまず理解されていて、次いでゲームができたりホッと過ごせたりするような場としても理解されていることがわかる。コミュニケーションの場としてまず理解されているというよりは、昼食をとる場所の一つとして理解されていることがわかる。ただ、スタッフや利用者と話しができることも、多くはないが参加理由となっており、コミュニケーションの場としても理解されていることが伺えた。また、参加理由ではないが、今後期待することとしては、昼食をとる場所ということ以上に、友達関係を広げられること、安心してコミュニケーションができること、ちょっとした愚痴や不安などを聞いてもらえること、学生生活上の相談ができることが挙げられており、この居場所活動の場にコミュニケーションが生まれたり人

間関係が生まれることを期待していることがわかる。自由記述の感想としても、友達ができたという感想は毎年度あり、この居場所活動が人間関係を育む場となっていることが伺える。また、学生生活の情報を聞けると言うことや、他者と話ができて楽しいというようなコミュニケーションが取れる場としての感想も見られた。何より、参加者がそのような人間関係の中で楽しく過ごしていることが伺えた。

４．ASD 学生が居場所活動に参加することで見られたこと

一概に ASD 学生といっても各学生の特徴はさまざまで、全員が同じ居場所活動に参加することで一様の体験をするとは言い難い。しかし、７年間の活動を通して何人かに共通してみられたこともある。そうした共通する例を以下にいくつか記すこととする。倫理的配慮から、以下の例では個人が特定されないように配慮した。

①　自然と挨拶する関係性が生まれること

居場所活動では、参加のために来室した学生や入り口を通り過ぎた学生に「こんにちは」、退室時には「いってらっしゃい」とスタッフが自然と声をかけていた。初めて参加した ASD 学生は、最初は自分に声がかけられていることに気付いていないのかと思えるほど、何のリアクションもなく促されるままに名簿に記入することが多かった。しかし、毎回声掛けがなされることで、次第に声掛けをしたスタッフに会釈や「こんにちは」と言うなどのリアクションがなされるようになり、それが継続すると、参加者同士でも「こんにちは」「いってらっしゃい」と参加者自らが声掛けをするような光景が見られるようになっていた。そのため、初めて参加する学生はどの学生が学生スタッフでどの学生が参加学生なのか一見しただけではわからないこともあった。また、声をかけられた学生も、同じ学生から声をかけられることに嬉しそうにすることも多く、挨拶以上の会話はなくともどこか自分が迎え入れられているような気持になっているように見受けられることもあった。

②　自分自身の特徴について緩やかに気づく場として

ASD 学生は、ちょっとしたトラブルを通して自身の特徴に気がついていくことが多々ある（独立行政法人日本学生機構，2014）。しかし、トラブルに遭遇するほど、他者も含めて周囲に関心がなく、関わりを持たなかったり、取り立てて自身を表現することのない学生も多く、その場合、トラブルさえ起こらない。そのため、自身の特徴に気がつく機会自体が乏しい場合もある。さしてコミュニケーションをとる人間関係がないために、自分のコミュニケーションの苦手さへの自覚はなく、コミュニケーションに困っていない、さらにはやろうと思えばできると思っている学生も少なくない。しかし、実際に挨拶をし合うような関係性ができ、コミュニケーションを取ろうと思えるような場面を体験した際に、挨拶以上に何を話せばいいのかわからない事態を体験したり、質問をされてもうまく答えられない自分に気づいて、コミュニケーションの苦手さに気が付くこともあった。そして、その後の学生相談のカウンセリングで、居場所活動での体験を通してコミュニケーションの苦手さが自覚され、どうにかしたいと思うことを話す学生もおり、そこから少しずつ自分の不器用さについてカウンセラーと共に考えていくことができるようになっていく例もあった。

③　自分の関心のあることをゆっくりと聞いてもらえる場

挨拶をし合えるようになると、その人と話をしてみようと思ったり、自分の話を聴いてもらいたいという気持ちも出てくるのか、自分の好きなことや関心のあることを話すことが増えてくることも多々あった。ASD 学生の話す内容は、家電について、天気について、人口ピラミッドについてなど、話題が狭すぎて日常生活ではなかなか同じ学生同士で共有できにくい場合が多いが、スタッフはそうした話をできるだけ聞くようにしていた。また、スタッフは同じテーブルに座っている他の参加学生や他の ASD 学生にも少し話を振るなどして、できるだけ複数で話を聞けたり、スタッフ以外の他の学生からも応答をもらえたりするような工夫を行っていた。そうしているうちに、Ｃさんは家電が好き、Ｄさんは天気が好き、Ｅさんは

人口問題が好きなど参加しているASD学生の間でも認識されるようになり、たとえば、「今度携帯電話を買い替えたいけど、どこのがいいの？」とCさんに尋ねたり、晴れの日に雨が降った際に「ね、これ、(晴れているのに)なんでこんな天気(雨)になるの？」とDさんに聞いたり、「ニュースで高齢化社会って聞いたけど、こないだ話してたことやんね」とEさんに話しかけたりするような参加学生同士のコミュニケーションも時折見られた。

④　聞いてもらう体験を通して、他の学生の話を聞こうとする

ASD学生の中には、自分自身が主に話をしてきた体験を通して、次第に他の学生の話を聞こうとする姿勢を持つ学生も少ないながらいた。あるASD学生Fさんは自分が話し終えた後に他のASD学生Gさんが話を始めると、Fさんはこれまで聞いてもらっていたのにもかかわらず、携帯電話を触って関心がなさそうにしていることがあった。それを見ていたまた別のASD学生Hさんが「もうちょっと話、聞こうよ」と声をかけるなどの場面もあった。声をかけたHさんは、居場所活動の中では最高学年であったが、1回生や2回生のときには、自分の話したいことを話した後は、他の学生の話を無視するわけではなかったが、席をたってうろうろしたり、携帯電話を触り始めることもあったため、その発言に学生相談スタッフは驚かされた。Hさんのように相手に話を聞くように促すまででなくとも、ASD学生でも、和やかに会話をしている雰囲気を壊すまいと、不器用ながら自分の知らない話題でも何か言葉を返そうとするような姿勢が見られることは多くあり、言葉を返すためにも話を聞こうとしているようにうかがえることもあった。

⑤　異性関係の話を何気なくできる場

参加しているASD学生が院生スタッフに好意を寄せたり、参加しているASD学生同士で交際し始めたりすることもあった。その際、ASDの特徴のためか、好意を寄せたり交際したりしているASD学生当人は周囲にも明確にわかるような露骨な表現方法となることも多く、周囲にいるスタッフにとっても他のASD学生にとっても戸惑わされることもあった。そうした場面でも、好意を抱いているASD学生当人は多少遠慮気味ではあるがそれでも臆せずに、「(院生スタッフの)○○さんのこと気になるから知りたいんです！」と院生本人に言ったり、見ているASD学生も「(院生スタッフの)○○さんのこと好きなん？」などとあけすけに表現することが多かったため、その話題についてスタッフや周囲の学生も交えて、異性への接し方などをある程度オープンに話すことができた。そして、その話題を発端に、気になる人にどのように声をかけるのかや、振り向いてもらうためにはどうしたらいいのか、声をかけられた方はどんな気持ちになるか、あるいは、付き合っていたとしてうれしい気持ちはわかるが他の人がいる場面で付き合っている人とどのように接するのかについてなどを、何気ない会話として話し合うことができた。また、学外で異性に声をかけてみたらダメだったという話をしたASD学生は、当初相手が思わせぶりだったことがいけなかったと話していたが、次第に、「相手にもタイミングがありますよね」と話すなど、話しているうちに他の人の反応を受け取ったり、自分なりになんとか考えようとして、はじめとは違う考え方をしてみるようなこともあった。

このような話題はなかなか同世代同士では恥ずかしくてできないことも多いが、ASD学生は実直に話すことができた。また、ASD学生にとっては、そうした実直なやりとりでないと理解できないことも多いが、異性関係の話はASDでない人たちの間ではあいまいな表現でなされることが多い。そのため、ASD学生とスタッフやASDでない学生も交えてやり取りを行うことで、ASD学生に受け取りやすい程度の実直な表現で、かつ多くの学生が配慮するようなことをASD学生にもシェアすることができた。

⑥　先輩・後輩関係

話し合ったりするような人間関係ができてくると、当然のことながら、互いのことを相互に知り合う。そのような中で、学年や年齢のことも当然知ることになる。すると、就職活動を始めた学生に、ASD学生から「就職活動ってどんなふうに始めてるんですか？」などと、自分の身近に迫ることを質問することもあった。そうした質問は、

質問を受けるASD学生にとっても普段聞かれないことで、かつ自分が具体的に答えられることでもあることから、多少得意げになりつつ「こんな風に進めてるけど…」と答える場面は毎年恒例の光景となっていた。そして、「〇〇先輩、どうぞ」とイベント時に先輩の順番を優先したりするなど、サークルや部活での先輩・後輩関係のような関係が見られるようになった。このように、実際に人間関係を作らず、単に学修を進めるだけの学生生活を送る中では得られないような体験を居場所活動の場でしていることが伺えることもあった。

5．考　　察

先述した通り、ASD学生は、人間関係を避けて過ごしたり、人間関係を積極的に作らないこともあり、結果として大学で人間関係が形成されずに過ごすことも少なくない。しかし、冒頭の事例でのＡさんのように、多少なりとも安全な人間関係があった方が、大学生活を適応的に過ごしやすいことも多い。ASD学生が居場所活動に参加することで、自然と安全な人間関係を築けることが期待できる。筆者は７年間居場所活動に参加するASD学生と関わってきた。そこで、本論文ではASD学生にとって、居場所活動への参加により結果としてもたらされたことについて、筆者が関わってきた居場所活動の例から考えたい。

アンケートにも見られるように、おそらく、ASD学生にとって居場所活動は参加当初から人間関係を作るための場所ではなく、単に昼食をとる場所だったのではないかと考えられる。そう考えると、ASD学生にとっては、人間関係が築ける場所ということは参加の動機として第１にはならず、ASD学生が居場所活動に参加するためには、どちらかというと昼食を取るためのいい場所であるということがより重要であると考えられる。そのため、活動の第一としては昼食を安心して居心地よく取れる場所となるようにすることであるだろう。過度なコミュニケーションや、かといって放置されるような場所ではなく、挨拶が交わせるぐらい、自分に関心を持ってくれていると分かるだけの最小の声掛けのある穏やかな場所が必要なのだろう。

しかし、そのような場で過ごしていると、少しずつ人に対する警戒心が緩んだり、あるいは、人に対して少しは関心を持てるようになり始めて、自然発生的にも人間関係が生じる。その中で、せっかく発生した心地いい人間関係を維持するために自分がどうできるのかという発想がASD学生にも生まれることはごく自然なことである。その際に参考になるのが、自分が居心地良く過ごしてきた人間関係なのではないだろうか。居場所活動では、スタッフの主な活動は話を聞くことである。何気ない話を聞く中で、参加学生の関心のあることに触れ、それについて関心をもって聞くということが重要な活動となる。ASD学生が関心をもって自分の話を聞いてもらうと、それをモデルとして、自身が人間関係を築こうとするときに活用できることもある。全員がそのようにモデルとしてスタッフの聞き方などを参照するわけではないが、そのような話を聞くというスタッフの姿勢が将来にモデルとして役に立つこともあると思われる。

話をし、話を聞くというような関係ができると、そこで話し合うことも多少なりともできるようになってくる。恋愛という話も多少の遠慮はありつつ、それでも臆せず話すことができ、ASD学生にとっても自分の関心の元で他者も含めて話がなされていくことになる。それは、偶発的にできることが多く、いつも、そのような話し合いができるわけではない。しかし、偶発的にでも自分の関心の元で話合いができ、自分以外の意見について聞いて自分で考えてみることは重要なことのように思われる。日戸(2014)は、ASDの人たちへの支援について、時に当事者が支援の展開について行けず、当事者がノーと言うことや、ブレーキをかけることが難しい場合が多いことを挙げ、本人の意思を尊重した主体的な選択を支えるような支援が期待されていると論じている。実際に、河合(2010)が論じるようにASDの人たちへの支援については、「心理療法などによって治療をするという方向ではなくて、障害に対してどのように訓練・教育していくかというのが主な対処法となっている」場合も少なくない。そういう意味では、ASD学生の意思によって参加されるこうした居場所活動で、ASD学生の関心のある話題で他者と相互に意見を交換しながら考えるということは、そのASD学生にとって最も近い一歩を考えるこ

とができることにつながり、非常に重要なことであると考えられる。そうした雰囲気を作るためには、同じ立場で相互に考え合うというような学生スタッフの存在や、参加者同士のコミュニケーションを促すような働きかけが必要と思われる。

そのような、学生相互のコミュニケーションが行われることから、先輩・後輩関係のような関係が築かれ、先輩・後輩の中でなされるような対人対応を具体的に体験することもあるのだろう。こうした自然発生的に生じる継続的な人間関係を通して、人間関係の良さも実感しつつ、自分の体験に最も近い一歩を探索しうることが、ASD 学生が居場所活動に参加する中で見受けられた。そうした居場所活動に参加した結果として、アンケートでも「友達ができた」ことが良かった、「相談できる人が出来た」ことが良かったなどの感想が得られたのだろう。このような結果として得られた副産物ともいえる ASD 学生支援に利する居場所活動を支えるものは、挨拶をしたり、一人で昼食をとっている学生に何気ない一言をかけつつ様子を見て横に座るなどの、スタッフのごく自然な配慮ではないかと思われる。結果として得られる利点である人間関係のスキルの獲得を第一の活動目的にすると、やや不自然で強制的なニュアンスが出てしまい、先述した日戸(2014)の指摘している ASD の人たちへの支援で起こりがちな当人を置きざりにする支援となってしまうようにも思われる。居場所活動では、人間関係を築くこと、スキルを獲得することを目的とするのではなく、単純に昼食を安心してとれる環境を整えることが重要であるだろう。そのなかで、人間関係が自然発生するような最小限の仕掛けをちりばめておくことで、結果として ASD 学生にとって人間関係についての自分に最も近い一歩を模索できるような支援につながるのだろう。このような支援を可能にするには、安定した場所の提供という大学側の力添えはもちろんだが、ごく自然に同じ学生として挨拶をしたり素直に応答できる学生スタッフや、年齢の近い少し年上の院生スタッフが必要である。

本論文では、これまでの 7 年間の活動を振り返り、ASD 学生が居場所活動に参加することが ASD 学生の支援と繋がると思われる点を考えた。今後は、参加している ASD 学生へのインタビューやアンケート調査を行うなどして、本論文で挙げたような点を確認することも必要だろう。

謝　辞

本論文の冒頭で記した事例について、公表に快諾いただいたＡさんに感謝いたします。また、居場所活動の中で出会った多くの学生さんたちには、多くのことを学ばせて頂き大変貴重な機会を頂いたことに、感謝いたします。最後に、本論文執筆にあたって協力いただいたＢ大学の学生相談スタッフのみなさまにも感謝いたします。

引用文献

独立行政法人 日本学生支援機構 学生生活部 障害支援課(2014). 教職員に対する障害学生修学支援ガイド 第 6 章　発達障害. 独立行政法人　日本学生支援機構, pp.179-190.

濱野清志(2001). 学生相談におけるピア・サポートの可能性：グループワークの活動をはじめて 学生相談：九州大学学生生活・修学相談室紀要, 3, 45.

畑中千紘(2011). 話の聴き方からみた軽度発達障害―対話的心理療法の可能性― 創元社.

日戸由刈(2014). 青年期の自閉症スペクトラムの人たちへの発達支援―心理面接のあり方を中心に― こころの科学, 174, 57-62.

岩田淳子(2007). 学生相談界の動向―発達障害学生の支援の研究―. 障害者問題研究, 35, 52-57.

河合俊雄(2010). 発達障害への心理療法的アプローチ 創元社.

児玉憲一(2000). 〈事例紹介〉学生ボランティアによる学生相談活動の試み：広島大学ピア・サポート・ルームのめざすもの(〈特集〉ボランティア活動)大学と学生, 429, 53-59.

町澤静夫(2001). 子どもの心の健康にとりくむ19 ランチメイト症候群について 学校保健のひろば, 84-87.

中島暢美(2013). 高機能広汎性発達障害の大学生に対する学内支援 関西学院大学出版会.

鬼塚淳子・田中慎也・野田涼馬・山本　萌・舎川優悟・鍵中信一・松岡一樹・杉浦美沙(2015).仲間同士の相互支援による居場所“ピアルーム”活動報告 ―ピアサポートによる居場所運営に携わるスタッフの視点を通して― 九州産業大学基礎教育センター紀要, 5, 17-24.

押江　隆・青木　剛(2009). 調査研究結果からの新たな取り組み：関西大学の実践(2)日本ピア・サポート学会第 8 回大会(日本女子大学).

大石由起子・水戸久美子・林　典子・稲永　努(2007). ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望 山口県立大学社会福祉学部紀要, 13, 107-201.

押江　隆・山田嘉徳・秋田知洋・青木　剛・田中俊也

(2011). 大学生のピア・サポート資源の探索―ソーシャルサポート、対処方略、大学生活不安との関連から ピア・サポート研究, 8, 38-47.
佐々木正美・梅永雄二(2011). 大学生の発達障害 講談社.
鳥越ゆい子・武佐和子・川西千弘(2013). Ｋ女子大学のピア・サポート活動における学生の成長―ピア・サポーターの成長に注目して― 帝京科学大学紀要, 9, 45-56.
和田秀樹(2010). なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか 祥伝社.